Safford, W. E. 1905—The useful plants of the Island of Guam. Contributions from the United States National Herbarium, vol. 9, p. 1-416, pls. 1-70.

Salesius, ca1906—Die Karolinen-Insel Jap, Berlin.

Schnee, P. 1904—Die Landfauna der Marshall-Inseln, nebst einigen Bemerkungen zur Fauna der Insel Nauru. Zoologische Jahrbücher, Abt. Systematik, Bd. 20, p. 387-412.

Schnee, P. 1911—Sechs an mir selbst beobachtete Skolopendrenbisse und einiges über Skorpionenstiche. Archiv für Schiff.- und Tropenhygiene, Bd. 15, p. 156-160.

Walleser, S. 1913—Palau Wörterbuch, Hongkong.

日本產全蠍目及脚鬚目*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

はしがき

予は今年5月6日全く意外にも山階芳麿侯御派遣第四次琉球列島生物調査隊

---

* 東亞產全蠍類脚鬚類の調査（其の二）

* 本稿は東京博物學會より發行せらるべき博物學叢書の1篇として去る昭和15年12月28日完稿，新年早々右叢書の編輯者の手に渡りそれより旬日を經ずして書肆西ヶ原刊行會に屆けられたのであるが，其の後右叢書の刊行は全く停頓し完稿以來滿2年半を閲したのに未だに印刷されない。それで當初の意圖を變更し本誌に掲載することにした。會員各位の御寛恕を仰ぐ。本稿が空しく書肆の編輯室に埋もれて居る間に著者の調査は進み既に（其の三）から（其の八）までを仕上げた。玆には舊稿の儘踏襲に附することにしたから讀者は既刊の（其の一）（其の三）（其の四）（其の五）（其の六）等をも併せ覽て本稿の補遺にして頂き度い。本稿を博物學叢書の1篇として準備中江崎悌三博士は予の請を容れ卷末に附錄として添へるべき「南洋群島の蠍」を特別寄稿せられた。それも本稿と運命を共にしたので本稿掲出の號の卷頭を飾らせて頂くことになつた。永らく停頓して御迷惑をおかけした同博士に西ヶ原刊行會に代り深くお詫び申し上げねばならぬ。

が齎した動物標品中蛛形綱脚鬚目關係の4瓶を交附され其の査定報告の責に任ずることになつた。然るにそれより一兩日を經て同侯御派遣第三次琉球列島生物調査隊採集に係る全蝎目及脚鬚目關係標品19瓶を落掌し之も一諸に調査せねばならぬことになつた。之等の大多數はサソリモドキでヤヘヤマサソリ之に次ぎ3頭のみがマダラサソリであつた。調査の結果は「琉球列島產全蝎目及脚鬚目」の題下に一文に纒め8月12日 Biogeographica の原稿として同誌編輯者の御手許に屆けた。然るに帝國版圖內に產する兩目關係の種類は僅少であるから之を機會に上記3種以外のものも實物を檢定して置き度くなり，知友先輩に格別の御援助を願つて小笠原產のサハダムシ以外は中々の珍品をも借用することが出來，更に海南島や北支の全蝎をも入手する機會に惠まれ一先づ夫等の成果を「日本產全蝎目及脚鬚目」の題下に11月30日午後2時より東大理學部二號館講堂に於ける日本動物學會例會席上講述し幻燈により撮つた寫眞の數々をも供覽した。右は舌によるものであるが今回は同じ題下に筆によるものを公にすることにした。調査開始以來半歲になつたに過ぎぬ乏しい資料で一書を編成させるのは心臟の强い次第であるが，此の際之を纒めるのは少くとも予にとり今後の調査に便宜であるし，亦日本產の之等2目を綜述した便利な文獻も見當らぬから多少は一般動物學者の御參考にもならうかと思ふのである。若し博物學叢書といふ企てが無ければ斯う急速に纒める氣も起らなかつたであらうから，無理にも執筆せねばならぬ運命に予を逐ひ込んだ畏友印東弘玄學士に最大の謝辭を捧げねばならぬと思ふ。江崎悌三博士，丘英通博士，佐藤井岐雄學士，古川晴男學士は或は專門の知識を頒たれ或は予の上司として不斷の鞭撻を賜ひ或は標品に文獻に格別の便宜を與へられ予をして奮起此の小冊を成さしめられた。衷心よりの謝意を表明し度いと思ふ。草莽の微臣高島春雄偶々皇紀二千六百年の佳き歲に際會し謹んで聖壽の萬歲を奉唱すると共に祝意の一端として本書を梓に上せ得るを無上の欣幸とするものである。

皇紀2600年12月28日

著　者　識

全　蠍　目

全蠍目はサソリの仲間である。サソリは蠍であつて蝎ではない。「蛇蝎の如く」は蛇蠆と書いてダケツと云ふのが正しい。蠍は蟲の名であるが全蠍となると一旦乾かして後鹽漬にしたものを指す，即ち藥名であつて「重修本草綱目啓

蒙」などにも尾を用ひるのを蝎梢，全身を用ひるのを全蝎と云ふとし，全蝎を本來の蟲の名と想ふのは非であると誌してある。現在でも全蝎は蝎其の物の意に用ひられる。予は脚鬚目に對し全蝎目と3字宛揃へる爲に擇んだのでそれ以外の事由を持たせてない。江戸時代には蠻舶が活物を，唐山からは鹽藏の物がは入つて來て長崎方言ジャムシと前記「啓蒙」に書いてある位であるから，サソリは時々舶來し當時の本草家や好事家の手には入つたに相違無いが，一般には毒のみ誇大に傳へられて其の實相を知る者は極めて尠かつたであらうと考へられる。之は交通の拓けた今日に於ても尙且つ云ひ得ることである。

本邦の蝎は故岩川友太郎氏が動物學雜誌に「本邦產の蝎類」(1906)なる報文を公にされて以來各種の學名は略々決定的となつた。近く1939年岸田久吉氏は第一次滿蒙學術調査研究團報告にキョクトウサソリ綜說とも稱すべき雄篇を發表された。日本の蝎に關し分類學的に最も寄與し且將來も寄與すべきは之等の2篇であらう。蝎の毒の病理學的方面の業績は内外共に頗る多いが本書は其の範域には全然觸れぬことにした。邦產3種の分類上の位置は下の如く且つ相互は檢索表により容易に識別することが出來る。

SCORPIONES 全蝎目

Buthidae キョクトウサソリ科

Buthinae キョクトウサソリ亞科

Buthus Leach (1815) キョクトウサソリ屬

(1) *B. martensii* Karsch, 1879 キョクトウサソリ (岸田久吉氏 1908)

Isometrus Hemprich et Ehrenberg (1828) マダラサソリ屬

(2) *I. europaeus* (Linnaeus, 1758) マダラサソリ (岩川友太郎氏 1906)

Scorpionidae コガネサソリ科

Ischnurinae ヤヘヤマサソリ亞科 (假稱)

Liocheles Sundevall (1833) ヤヘヤマサソリ屬

(3) *L. australasiae* (Fabricius, 1775) ヤヘヤマサソリ (岩川友太郎氏 1906)

A 毒針の下方に袋刺を缺く

B 櫛狀器には16〜25齒を列生する．第3，第4步脚の脛節先端に1棘を具へる ……………………………………………… キョクトウサソリ

BB 櫛狀器には5〜8齒を列生する．第3，第4步脚の脛節先端に棘を缺く ……………………………………………… ヤヘヤマサソリ

AA 毒針の下方に袋刺を有する．櫛狀器には17〜19齒を列生する．第3，第4歩脚の脛節先端に棘を缺く…………………………………………………マダラサソリ

1　キョクトウサソリ（極東全蝎）

Buthus martensii Karsch, 1879

Buthus martensii Karsch, Mitteil. Muenchener entomol. Vereins vol. iii, p. 112 (1879)

色彩　1940年8月15日山西省繁峙縣甇口鎭大日本軍警備隊トーチカにて成城高等學校生徒副島英三郎氏が捕獲した成雌につき生時の色彩を記載する。液浸の標品では背面は前腹は濃褐色　觸鬚・歩脚及び後腹は汚黄褐色を呈するのが常であるが生時は前腹の暗青色と他の部の淡黄色とは好き對比をなして爽々しい感を與へる。液浸のものからは一寸想像出來ぬ色彩である。

背面は背甲は帶黄暗青色，觸鬚は灰黄色で歩脚より多少濃く鉗のみ稍々濃色となる。前腹は暗青綠色，第7節は前緣のみ暗黄色で他は淡黄色に漸移し，後腹は淡黄色，第5節は黑青色（液浸のものは黑褐色となる）で毒嚢に接する小域のみ淡黄色。毒嚢は黄色で毒針の基部は黄褐色，端部は黑色。歩脚は何れも灰黄色或は淡綠黄色。腹面は前腹各腹板は前半暗綠色，後半淡青綠色，最後の節のみ汚黄綠色に推移する。第3乃至第6腹板には外緣に近く左右1雙の黄白色方形斑が透いて視える。之は書肺である。後腹は黄褐色で4條の縱畝は黑褐色，第5節目は黑青色。



第1圖　昭和14年12月南京にて購入の全蠍（乾燥品）略々自然大〔江崎悌三博士寄贈寫眞〕

大腮　淡黄色。第1節は背甲下に隱れ，第2節は上下より扁壓され長さは幅に

勝る。前端には刺毛を粗生する。其の內緣は鉤狀となり3齒を具へる。下面には刺毛を密生させる。第3節は同じく鉤形で可動性，3齒を具へ第 節端部に對し小さい鉗を形成する。齒狀を成す部分のみ赤褐色。

觸鬚 基節は大部分大腮に隱される。轉節には不規則な畝狀隆起が多く，爾後の節よりも明かに短小で基部は細まり端部は膨れ上面に少數の刺毛を生ずる。腿節は略々圓柱狀で內外兩緣に顆粒の畝が明瞭に認められる。外緣の端部に近い方には刺毛を列生。第4節脛節は前節より僅かに長く基部に近い內緣は隆起し全體として前節よりも膨れて居る。顆粒の畝は前節に等しく，刺毛は少い。第5節掌は主部は楕圓形に膨れ端部は主部と略々等長であるが內方に緩く弧狀をなす鉤となり，同じく鉤狀で可動性の第6節と共に鉗を成す。兩鉗枝は內外兩緣に短細毛を列生，上鉗枝では中に2～3本の長細毛を交へる，上鉗枝の內面には1條の如く見えて其の實12條程の斜に走る顆粒の條線があり，其の內側には13個の黑赤色顆粒が見える。下鉗枝即ち動鉗枝も顆粒條線及び內側の黑赤色顆粒は同樣である。

背甲 略々梯形で前狹後廣，頗る顆粒に富み特に隆起して畝となつて居る顯著なものは前緣に發し斜內方に中眼丘に到る1雙，中眼丘の後方より發して後緣に達する1雙である。1雙の中眼は黑色で明瞭。前外隅に近く側眼丘があつて各3個の小側眼が見られる。之までの本邦の文獻には側眼は各側5個と事も無げに書いてある。

前腹 背板7枚は良く發達して居る。中畝並びに側畝は各節共明瞭。背板は下方のもの程幅廣く第7節のみ前廣後狹で梯形狀，側畝も內外2條ある。下面は上より順に觸鬚の基節，其の下方直角三角形狀の第1步脚腮葉，其の外方の觸鬚腮葉，胸板，性扉，第2節腹板，櫛狀器等一樣に淡綠黃色，第3乃至第6腹板は橫長の矩形で外下方に近く1對の氣門を開く。何れも平滑，第7節のみ前廣後狹で顆粒多く縱走する2雙の畝がある。

櫛狀器 外緣部は大體3部に區分される。長短多數の刺毛を側上方に列生。中間部は8部程に區分され何れも短小で側上方に刺毛を生ずる。內緣部は紡錘狀小板で之を隔てて牙狀の齒が列ぶ。本個體では右19本左18本である。本種は♂は19～25本，♀は16～20本と稱され齒數が二次性徵の一つに算へられて居る。

後腹 明らかに前腹よりも長い。第1節は長さは幅に略々等しいが第2節以降は長さは幅に優る矩形狀である。上面は第1節は前端と正中とが凹み2雙の顆

粒の畝が著しい。第2, 3, 4節も略々同様であるが，第5節は少數の顆粒不規則に散在して內方の畝を示さず，外側の畝も幾分不分明。毒囊は丸く膨れ上方よりは心臟形，側面よりは卵形に見え，先端は毒針となり毒囊と等長位，內方に彎曲し鋭く尖る。下面では第1乃至第4節は2雙の顆粒性縱畝著しく第5節のみ縱畝は3條，第5節後端廣い節間膜上に十字形をして肛門が開口。毒囊には僅數の刺毛を生ずるのみ。毒針に對向する袋刺を生じない。



第2圖　昭和9年9月朝鮮京城にて購入の全蠍（鹽漬）種類は前圖と共にキョクトウサソリ　自然大〔江崎悌三博士寄贈寫眞〕

步脚　斑紋無く同形で後方のもの程長大。第1步脚の前跗節は多數の刺毛を生じ，端部に於て1對の棘を前方に出す。第2步脚も同樣。第3及び第4步脚は脛節先端に1棘，前跗節に2棘を具へる。各步脚は跗節先端に大形な2本の上爪と小さい1本の下爪を，上爪の後上方に1起出を附隨させる。

測定　成雌（單位粍）。茲に體長は背甲の前端より腹部末端まで，觸鬚長は腿節の基端から蹠節末部まで，步脚長は腿節基部より跗節の上爪の末端までを測つた値である。

體長 56　背甲長 7　背甲幅 8　腹部長 49　腹部幅 9.5　大腮長 2.5　觸鬚長

23 第1步脚長 13 第2步脚長 15 第3步脚長 19 第4步脚長 25

二次性徴 本種の二次性徴に關しては近年沖波實氏（1939）岸田久吉氏（1939）の報文がある。岸田氏が對比された項目は頗る多い。判り易い形質としては次の2點に歸するであらう。1）♂の觸鬚に於ける動鉗枝は基部に近く1個の疣状の膨出があり不動鉗枝の之に對應する部位は陥凹して居る。♀に於ける膨出と陥凹は殆ど不明瞭で且つ鉗枝は♂のそれよりも稍々細長である。2）♂の性扉は左右兩半が正中で會合はするが癒着せず可動性である。

分布 分布に關しては岸田氏の報文（1939）に詳しい。蒙古・滿洲・關東州・朝鮮・臺灣・民國（河北省・河南省・山東省・山西省・江蘇省・福建省等）に産する。臺灣からは近年全く採集されぬのであるが，同島には居なかつたといふ積極的證據の提供も至難である。

2 マダラサソリ（斑全蝎）

Isometrus europaeus (Linnaeus, 1758)

Scorpio europaeus Linnaeus, Syst. Nat. ed. 10, p. 625 (1758)

Isometrus europaeus, Kraepelin, Jb. Hamb. wiss. Anst. viii, p. 245 (1891)

以下は成雌に就いての記載である。

色彩 液浸の材料では背面は黄色の地に黒褐色の斑紋があり前腹部では規則的に，觸鬚及び歩脚では不規則的に並ぶ。腹面は歩脚共淡黄色，後腹部のみ背面同様黄色で黒褐色不規則の斑紋が多い。マダラサソリの名に背かぬ。

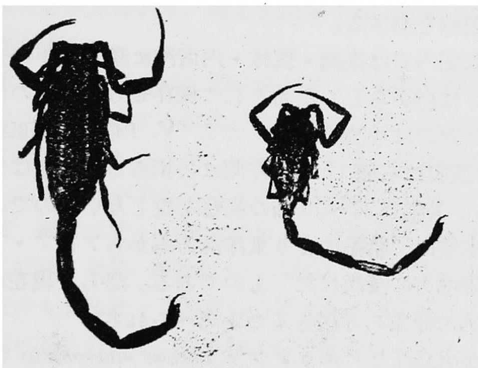
大腮 黄色。第1節は背甲下に隱れて見えぬ。第2節は上下より扁壓された圓筒状，黒褐色の網状斑紋があり，其の內緣は延びて鉤状となり，同じく鉤状で可動の第3節に對向し小鉗を形成する。

觸鬚 基節は大部分大腮に隱される。轉節は黒褐色の大斑を有し腿節に近く一大陥凹が見られる。第3節腿節は略々圓柱状で內外兩緣並びに其の間に2條夫々顆粒の畝を生ずる。黄色の地に黒褐色の斑點が多い。脛節は前節と略々等長ながら中央部一層膨大し，過半は黒褐色斑紋で占められる。掌は基部黄色で小黒褐紋散在し，端部は黒褐色で先端に至るに從ひ淡色に變る長鉤（上鉗枝）となる。第6節は下鉗枝で上鉗枝に對向し鉗状を呈する。兩鉗枝は掌より明かに長く對向面には6乃至7列に分岐する顆粒條がある。內外兩面に細毛を列生。

背甲 汚黄色で黒褐色斑が多い。底邊と高さと略々等長な梯形で顆粒夥多，中

央を劃する縦溝がある。前縁は内方に弧狀に抉られる。側眼丘に各3個の小なる側眼があり中眼丘には左右1對の中眼が位置する。各小眼は黑褐色で光輝がある 。

前腹 背面には良く發達した7背板が見られる。黑褐色斑は中畝に沿ふもの略々1縦條を成し其の側方に曲折ある稍々太い黑條が各1本ある。中央の1條と左右の兩條との中間，背板後縁上に各1個の黑褐斑があり第7背板に至り亂れて不規則斑紋となる。背板は第1のもの最も幅狹く爾後次第に幅を增し第7背板は梯形を成して尻つぼみとなる。何れの背板も顆粒に富む。下面では觸鬚基部の下方に半月狀の1雙の腮葉，其の内方に1雙のバナナ狀の第1步脚腮葉が見られ，其の下方第3，第4步脚の基節に挾まれたのは胸板である。其の下方1雙の慈姑狀の性扉は左右相接し何れも中央に陷凹あり，之に接し橫に狹い甲板即ち第2腹板が見られ中線に沿つた上半は深い溝となる。第3乃至第6腹板は總べて幅廣い矩形で淺い2縦溝で3分せられる觀がある。第7腹板のみ稍々圓い梯形で幅廣く下方は狹まり光澤に乏しく顆粒に富む。



第 3 圖　マダラサソリの雌雄
左は♀で小笠原產　右は未成熟の♂で琉球石垣島產　略々自然大〔原圖〕

櫛狀器 外緣部は縦の2溝により3區域に仕切られ多數の毛を主に上方に列生せしめる。中間部は大小7部分程に仕切られる。内緣部は紡錘狀の小片を經て牙狀突起下方に向ひ櫛齒狀に並列する。其の齒數は各側17～19本である。

後腹 背甲及び前腹の合長よりも長い。各甲板は後方のもの程細長い。毒嚢は上面より觀れば心臟形で鋭い1鉤即ち毒針を出す。毒針は内下方に彎曲し長さは嚢部に及ばない。毒嚢下面末端に1鉤（袋刺）を出し毒針に對して居る。

步脚 上面は黃色で黑褐色の斑紋不規則に生じ下面は汚黃色で斑紋を缺く。何れも同形で後方のもの程長大，生ずる刺毛は先方のもの程數多く跗節内面の毛

は刷毛状，跗節先端には2鉤爪を附隨させる。第3，第4兩歩脚の脛節と跗節に棘無く前跗節の先端に2棘を具へる。

測定 成雌（單位粍）。體長 44 背甲長 5 背甲幅 5 腹部長 39 腹部幅 7 大腮長 2 觸鬚長 19.5 第1步脚長 9.5 第2步脚長 11 第3步脚長 12.5 第4步脚長 15

二次性徵 本種は♀も華奢であるが♂は更に甚しく觸鬚纖細，尾狀の後腹も狹長で軀幹を遙かに凌駕して居る。之は全蝎中二次性徵の最も顯著な1例で分類學者の夙に氣附いて居る處である。例へば Werner (1934) の Monograph の149頁に揭げられた圖を參照せよ。♂は體長70粍にもなる。尙♂の掌は殆ど滑かであるが♀は多少明瞭な隆起線を有する。

分布 前報に記せる如く本邦版圖内では臺灣・琉球・內南洋に產し近年小笠原諸島で蕃殖する樣になつた。♂は尠いらしく標品として保存せられるものは大抵♀である。此處に記載に用ひたのは小笠原母島にて 7. V. 1939 岡部正義氏採集の成雌である。櫛狀器の齒數は右側17本，左側は折損ある爲全數は知り得ないが17本まで數へられる。矢張り17～19齒の範疇を脫しないものであらう。Pocock (1900) に據ると本種は“船舶により東洋區方面からアジア・アフリカ・アメリカの熱帶・亞熱帶地方に浸潤した”ものである。恐らく現在は熱帶・亞熱帶地方に殆ど汎世界的に分布して居るものと考へられる。

色彩斑紋本種に紛らはしい海南島產ヒノモトサソリ *Lychas mucronatus* (Fabricius, 1798) は 1) 第3，第4兩歩脚の脛節先端に內方に向ふ1棘あること 2) 櫛狀器の齒數は17～22本なること 3) 後腹の各節は幅廣く頑丈で♂に於ても特異でないこと等により識別される。

3　ヤヘヤマサソリ（八重山全蝎）

Liocheles australasiae (Fabriciu , 1755)

Scorpio australasiae Fabricius, Syst. Ent., p. 399 (1775)

Liocheles australasiae, Simon, J.A.S.B., lvi, p. 113 (1887)

以下は成雌に就いての記載で色彩はアルコホル漬標品に基いてある。

色彩 背面は暗褐色，觸鬚のみ褐色，背板は多く灰褐色で灰白色の關節膜が良く發達して居る。後腹は暗褐色で毒囊のみ黃色。腹面は汚黃色，觸鬚は褐色，後腹は毒囊を除き暗褐色，腹板は灰褐色。

大腮 褐色。第1節は隱れて見えず，第2節は上下に扁き圓筒狀，黑褐色の不

規則線條亂れ滑かで光澤があり，內緣は延びて鉤狀となり同じく鉤狀で可動の第3節と共に小鉗を形成する。鉗を成す兩鉤は鋭い齒を列生，下面は刷毛狀に毛を密生する。

觸鬚 背面より觀れば基節に續く轉節は凹凸著しく顆粒多く光澤がある。上方に數本の長刺毛を生ずる。腿節は圓柱に近く，內緣の鋸齒狀を成す顆粒條は黑色に染められる。脛節は更に幅廣く基部は强く內方に抉られる。掌は最も著しく長さは背甲長を凌駕し，基部より急に膨れて幅廣く外緣の顆粒條は黑色，端部は黑色の鉤となり尖端のみ淡色，略々同大同形の上鉗枝と共に鉗を成す。鉗は掌よりも明かに短く對向面は2條の並行せる顆粒條を成す。各節何れも頗る顆粒に富み光澤あり，刺毛を粗生する。掌には個體により略々正中を黑褐色の縱條が走る。

背甲 褐色で不分明な網狀斑があり，顆粒を密布し光澤に富む。前狹後廣の四邊形で中央を劃する縱溝があり後緣に近く斜上に走る1雙の皺襞がある。前外隅に側眼丘存し各3個の小側眼がある。又縱溝の中央より稍々上に中眼丘があり左右1對の中眼が位置する。各小眼は夫々黑色。

前腹 雌では肥えて長大である。背面には7背板が見られる。第1，第2のものは幅狹く褐色，爾餘のものは幅廣く灰褐色或は汚褐色，皺襞多く光澤に富む。最後のものは略々半圓形につぼまる。關節膜良く發達し灰白色を成して各甲板の間に認められる。正中線上の中畝は餘り著しくない。下面では第2步脚の下方第3，第4兩步脚の基節に挾まれて五角形の胸板が見える。Y字狀の窪みが中央より稍々下方にある。其の下方對性の器官は性扉であるが兩半は縱條を隔てゝ左右癒合し全體は長楕圓形となる。第3乃至第6腹板は總べて幅廣い矩形で灰褐色或は淡汚褐色，淺い2縱溝で3分せられる觀がある。第7腹板のみ外緣圓く半圓形を成して終る。各腹板は點刻を密布し光澤がある。

櫛狀器 外緣部は3部に區劃され刺毛を數本生ずる。中間部は二部に分れるが殆ど1枚の甲片となつて居る。內緣部より生ずる牙狀突起は太短く圓筒狀で數も少い，前報に於て八重山產13例（3♂♂10♀♀）につき齒數を調べたのでは4〜7齒であつた。內南洋ヤルート島產6♀♀（高桑良興氏の御厚意に依るもの）では片側の端部折損した1例を除けば右6本左6本，パラオ島產1♀（羽根田彌太氏の御厚意に依るもの）では右7本左7本なるを示し，4〜8齒の範疇を出でぬものと想はれる。1例につき計測するに櫛狀器の全長18粍位のものゝ最外

側の1歯（最も太きものに該當する）では長さ 3.4 粍幅 2.7 粍位。

後腹 後腹は軀幹に遙かに及ばぬ。毒囊のみ黄色，他は黑褐色乃至暗褐色。各節顆粒多く長刺毛を列生する。第3，第4兩背板には徴小なる端棘が認められる。毒囊は下方に 20 本程の刺毛を生じ內下方に鉤曲する鋭い毒針のみ赤褐色。毒針は長さ遙かに毒囊に及ばず且つ對向する袋刺を生じない。

步脚 上面は黄褐色で肉眼では認められぬ程度の不規則な褐色斑紋を生ずる。何れも同形で後方のもの程大。膝節は長さ腿節に及ばぬが幅は廣い。第3，第4步脚の脛節先端に棘無く前跗節の先端は內方に1棘を 跗節の先端に近く外方に向く1棘を具へる。跗節末端には大形な2上爪と小さい1下爪とを附隨させる。

測定 成雌（單位粍)。體長 35 背甲長 5 背甲幅 5.5 腹部長 30 腹部幅 6 大腮長 2 觸鬚長 17 第1步脚長 8 第2步脚長 9.5 第3步脚長 10.5 第4步脚長 11

二次性徴 ♂では 1) 前腹短小で肥大せず 2) 性扉は左右兩半明瞭に區劃され，癒合して長楕圓形にならない。♂は♀に比し少いこと他の蝎と同樣である。Pocock (1900) に據れば成雌では 45 粍或はそれ以上に達するものありとのことである。

分布 帝國版圖內では臺灣（鹿野忠雄氏〔1930〕に據れば紅頭嶼にも產することと明かである)・琉球・內南洋に產する。國外では Indo-Malaya 及び Austro-Malaya 地方に汎布する（中支・南支・ビルマ・テナセリム・比律賓・馬來群島・ニューギニア・北オーストラリア・タヒチ）と云はれる。日本產全蝎中最も個體數多き種類と思はれる。

全蝎目は Kraepelin の基礎的述作 (1899) に於て Bothriuridae, Scorpionidae, Buthidae, Vejovidae, Chaerilidae, Chactidae の6科に分たれ近く Werner (1934) は下掲の6科に按配した。各科の檢索表を譯出すると下の通りである。尙岸田久吉氏 (1939) は胸板が2枚に分岐する Bothriuridae のみを裂胸亞目 Schizostethi, 他の總べての蝎は胸板は1枚であるの故を以て全胸亞目 Holostethi と全蝎目を先づ2亞目に分ち夫々に科を配置する法式を採られて居る。

1 胸板は少くとも幅は長さの2倍に達する．併し屢々長さが幅を超えること

がある ………………………………………………………………………………2

— 胸板は2枚の細い横斜の板に岐れ幅は長さの數倍（時に殆ど認め難いこともある）．櫛狀器の中間部は大抵眞珠を列ねたる如き形 ……………………………………………………………… Bothriuridae ヒラタサソリ科

2 步脚跗節の基部に關節膜中に外側及び內側に向ふ1〜2個の距跗がある．胸板は屢々前方に向つて狹長となる ………………………………………………4

— 步脚跗節の基部に關節膜中に外方にのみ1個の跗距がある．胸板は顯著な五角形 ……………………………………………………………………3

3 毒針の下方に袋刺がある……………………………………………………………………Diplocentridae ディプロケントルス科（假稱）

— 毒針の下方に袋刺は無い………………………Scorpionidae コガネサソリ科

4 頭胸部各側に3〜5個の側眼を具へる………………………………………5

— 側眼は各側2個（稀に缺くこともある）……………………………………………………………………Chactidae カクタス科（假稱）

5 胸板は前方は三角形を成して狹まる．極めて稀には五角形を呈する（此の場合には第3, 第4步脚の跗節基部に跗距を具へる）．櫛狀器の中間部は眞珠を列ねた樣には見えない．側眼は3〜5個，往々毒針の下方に袋刺がある……………………………………………………Buthidae キョクトウサソリ科

— 胸板は側縁平行し幅は長さに勝り深い中央溝が見られる．櫛狀器の中間部は往々眞珠を列ねた如き樣子．側眼は常に3個 步脚跗節の基部に跗距を缺く．毒針の下方に袋刺も無い……………………Vejovidae アカサソリ科

脚 鬚 目

1862年 H. C. Wood は *Thelyphonus stimpsonii* 即ち今日のサソリモドキを記載した。W. Stimpson の採集品で產地は "Japan" となつて居る。日本より知られる最初の脚鬚目である。1897年 K. Kraepelin は臺灣產に基き *Typopeltis formosanus* を記載したが之は今日のサソリモドキの♂である。1906年 F. Schwangart は臺灣產につき *Typopeltis crucifer crucifer* Pocock, *T. crucifer kochi* n. subsp. の2型あるを認めたがどちらも今日のサソリモドキ其の物である。1908年我が岩川友太郎氏は日本動物學彙報に琉球及び臺灣のサソリモドキの種の同定なる1報文を公にし琉球及び臺灣產サソリモドキは *Typopeltis stimpsonii* なることを闡明された。爾來永く此の學名が踏襲され其の觀察の正確と相

俟つて貢獻する處多かつた。予は此の大先覺に深き敬意を捧げるものである。1911年Kraepelin は *Schizomus sauteri* の記載を公にしサソリモドキ以外にも脚鬚目の邦産種あるを示した。1930年岸田久吉氏は短鞭族の他の1種小笠原に産することを報じ之をサハダムシ *Trithyreus sawadai* なる新種とせられたが正式の記載は未だに出て居ない。翌1931年大島廣氏はサソリモドキが熊本縣天草牛深に居ることを報ぜられた。1936年遂に無鞭亞目が日本の Fauna には入つた。江崎悌三氏は *Charon* を內南洋 Palao にて獲たることを報じ，之を *Charon grayi papuanus* Thorell と同定された。偶然にも鹿野忠雄氏は同じ年の日本動物學會大會に臺灣紅頭嶼で *Charon* を採つたことを演說された。1940年江崎悌三氏はサソリモドキ綜說とでも稱すべき「サソリモドキの分布」なる1文を發表なさつた。予は1940年5月以來日本產脚鬚目關係の資料蒐集に努め一先づ其の成果を「日本產全蠍目及脚鬚目」の題下に日本動物學會1940年11月例會席上講述した。

邦產脚鬚目既知種の分類上の位置は下の如く且つ相互は檢索表により容易に識別することが出來る。

PEDIPALPI　脚鬚目

Uropygi　有鞭亞目

Tartarides　短鞭族

Schizomidae　ヤイトムシ科

Schizomus Cook (1899)　ヤイトムシ屬

(1)　*S. sauteri* Kraepelin, 1911 ヤイトムシ（岸田久吉氏 1913)

Trithyreus Kraepelin (1899) サハダムシ屬

(2)　*T. sawadai* Kishida (MS.) サハダムシ（岸田久吉氏 1930)

Urotricha　長鞭族

Thelyphonidae　サソリモドキ科

Typopeltis Pocock (1894) サソリモドキ屬

(3)　*T. stimpsonii* (Wood, 1862) サソリモドキ（高松數馬氏 1883)

Amblypygi　無鞭亞目

Tarantulidae　ウデムシ科

Charontinae　カニムシモドキ亞科

Charon Karsch (1879)　カニムシモドキ屬

(4) *C. grayi* (Gervais, 1844) カニムシモドキ (高島 1940)

A 背甲は長さ幅に勝り外縁は略々平行して居る 腹部末端の3節は圓筒狀となり先端に尾狀附屬物を附隨せしめる …………………………… 有鞭亞目

B 背甲は4乃至5枚に分岐し尾狀附屬物は短く1～4節 …………………………………………………………………………… 短鞭族 ヤイトムシ科

C 背甲は4裂. 雌の尾狀附屬物は4節 ……………………… (ヤイトムシ)

CC 背甲は5裂. 雌の尾狀附屬物は3節 ……………………… (サハダムシ)

BB 背甲は1枚で分岐せず尾狀附屬物は長く多數節より成る ……………………………………………………………… 長鞭族 サソリモドキ科

(サソリモドキ)

AA 背甲は長さ幅に劣り外縁は弧狀に膨出. 腹部末端は圓く尾狀附屬物を附隨させない. 第1步脚の跗節は異様に細長で多數節より成る ……………………………………………………………… 無鞭亞目 ウデムシ科

B 前胸板は下端に於て膨大し幅廣き扁平板となる 中胸板も後胸板も幅廣い. 步脚跗節に褥盤を缺く. 第4步脚の脛節は1節乃至2節 ……………………………………………………………… フリニクス亞科 (假稱)

BB 前胸板は下端僅かに膨れる程度. 中胸板及び後胸板は小さく方形或は幅は長さに劣る

C 跗節末端に褥盤を缺く 第4步脚の脛節は3節 ……………………………………………………………… タランツラ亞科 (假稱)

CC 跗節末節には明かな褥盤がある. 第4步脚の脛節は4節 (稀に3節) ……………………………………………………………… カニムシモドキ亞科

(カニムシモドキ)

1 サソリモドキ (擬全蝎)

Typopeltis stimpsonii (Wood, 1862)

Thelyphonus stimpsonii Wood, Proc. Acad. Nat. Sci. Philad., 1862, p. 312

Typopeltis Stimpsonii, Pocock, Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 6, vol. xiv, no. 80, p. 126 (1894)

以下は成雌に就いての記載で色彩はアルコホル漬標品に基いてある。

色彩 背面黑色. 步脚及び尾狀附屬物は赤味を帶びる。腹面は赤黑色, 步脚の基節は際立つて栗茶色. 觸鬚の基節も赤味が强い。

大腮 短小で目覺ましからず，第2節は赤褐色で先端は黒色の鉤となり同色の第3節と鉗狀を成す。其の附近刷毛狀に毛を密生する。

觸鬚 雄偉で先端鉗狀を成す。基節腹面は他の諸節よりも赤味强く稍々滑かで光澤に富み前方に鉤狀の1突起がある。轉節は幅狹く內側に廣く陷入し背面より觀る時は內方に5棘並び生じて脊椎動物の五趾脚狀，腹面より觀る時は之に對し同じく內方に2棘起生する。腿節は肥大するも平凡。脛節は背面に於て內方に1大棘を派出し尖端銳い。蹠節も形狀前節に似て1大棘を內方に出し腹面に於ても1小突起がある。附節は單一の鉤狀で蹠節の1大棘と略々同大同形，蹠節の大棘に向つて動き兩者にて鉗を成す。基節及び轉節の腹面內方には刺毛を列生，蹠節內面にも刺毛多く中に觸官の機能あるらしき1長刺毛を混ずる。

背甲 前後に長い5邊形狀で前緣に刺毛を粗生する。前緣に近く眼丘上に左右1對の中眼，それより側緣を成す溝に沿つて下れば各側に3個の側眼がある。背甲には體節の區分は認められぬが，全體顆粒狀突起多く上半正中の縱溝は顯著。

胸板 觸鬚の基節，第1步脚・第2步脚の基節に劃される前胸板は下向の2等邊三角形。第2步脚の基部に挾まれ身動きならぬ有樣になつて狹小な中胸板があり上下2枚に區劃される。第4步脚の基節及び第1腹板に圍まれる所上向の2等邊三角形を成して後胸板がある。

腹部 小判形で12節ある。背面より觀る時は第1乃至第9腹節迄は幅廣く略々梯形であるが第10乃至第12節は急に狹まり第12節は圓筒狀。此の先には更に狹長で體長を凌駕する鞭狀物が附屬して居る。50節を超え細毛に交つて刺毛を粗生させる。腹面より觀れば腹板は赤味强く光澤がある。第5乃至第8腹板に於て各1雙の顯著な陷凹がある。縱位の楕圓形に見え其處のみ光澤無く之等の凹みは各腹板を略々等面積の3區域に分割する觀がある。背面に於ては圓形の凹みに見え同じく第5乃至第8腹節に顯著である。之は內部に於て背腹兩甲板を垂直に連ねる筋肉があつてキチンの外皮のそれに附着する部分が斯かる凹みとして見えるのである。

步脚 第1步脚は他の3對に比し著しく纖弱。基節・轉節は短太，腿節・膝脛節・蹠節は細長で短刺毛を粗生する。附節は赤味强く9節に岐れ毛を密生する。老熟した個體では先端の2〜3節は內方黑染し缺刻を示す。或る個體では先端より2番目のもの即ち第8節に於て缺刻は最も顯著であり，他の個體では左

のものに何等の異常無く（即ち黒染或は缺刻の部認められず）右のものは上より4節目のみが黒染し且つ缺刻を示した。第2乃至第4步脚は形貌尋常で後方のもの程長大となる。基節の腹面は何れも滑かで光澤がある。轉節は短太，腿節は肥大して長く，短い膝節，細長の脛節，短い蹠節を經て跗節は3節に區劃され先端に鉤曲した2爪がある。蹠節及び跗節には刺毛を密生。

測定　成雌（單位粍）。體長 45　尾狀附屬物長 30＋x（中途にて折損）背甲長 17　背甲幅 10　腹部長 28　腹部幅 13　大腮長 5　觸鬚長 21　第1步脚長 55　第2步脚長 31　第3步脚長 33　第4步脚長 44

二次性徵　本種は二次性徵顯著で成雄は次の3點のみでも成雌とた易く識別される。1）觸鬚轉節は背面よりは前方に疣狀の突起を出し之より後方は小さい4齒狀突起がある（成雌では第2齒最大）2）觸鬚脛節の內方に向ふ突起は先端篦形に擴張し齒狀突起がある（成雌では突起は棘狀） 3）第2腹節は腹面に於て外緣部を除き栗茶色で僅かに盛り上つた狀を呈し中央に不明瞭な縱溝がある（成雌では此の部分は大體四角形で中央の溝で明かに左右2區に岐たれる）。

分布　國內では臺灣・琉球・九州のみから知られる。臺灣では南端の恆春半島に極めて普通，東海岸では臺東から花蓮港方面まで產する。鹿野忠雄氏よりの御來信で紅頭嶼にも棲息することを知つた。琉球では西表島，鳩間島，石垣島，沖繩本島が旣知，九州は離島の德之島，奄美大島，諏訪瀨島，平島，口之島，硫黃島，竹島を經て薩摩半島の南端枕崎，坊，泊附近に產し又上甑島（鹿兒島縣下），熊本縣天草島下島牛深（北緯 32°11′）にも棲息する。國外では支那の南京（伍獻文氏，江崎悌三氏），大冶（石川重治郎氏標品所藏）其の他恐らく揚子江以南の地に汎く分布するものと想はれる。民國以外よりは未だ見出されない。

2　サハダムシ（澤田蠍）

Trithyreus sawadai Kishida (MS.)

Trithyreus Kraepelin, Tierr., Scorp. etc. p. 234 (1899 March)

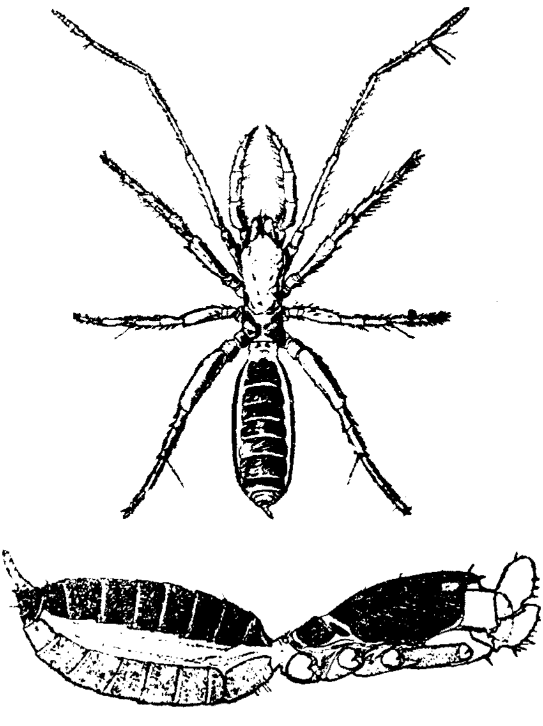
Tripeltis Thorell, Ann. Mus. Genova xxvii, p. 554 (1889) (nom. praeocc.)

Triplomus Cook, Proc. Ent. Soc. Wash. vol. iv, no. 3, p 250 (1899 April)

Habbardia Cook, Proc. Ent. Soc Wash. vol. iv, no. 3, p. 250 (1899)

旣揭の4種は調査するのに手頃の大きさであるが本種と次のヤイトムシは體長1糎に滿たぬ小脚鬚類である。本屬は背甲の後方のものは方形を成す左右の

2枚に完全に分離するか或は狭い透明で色無き稍々膜質の中間部で隔てられる，亦ヤイトムシ屬では後方の1枚は全然分岐しないか或は中央に縫合線を遺存せしめるのみである——と從來考へられて居たが此の標徴は然る如く顯著なものではない。Kraepelin (1911) が Hansen の說に聽き の尾狀附屬物4節に分岐することをヤイトムシ屬の之に取つて代るべき標徴としたのは尤もである（サハダムシ屬では3節）。本屬はアフリカ・印度・セイロン・ビルマ・タイ・シンガポール・比律賓・小笠原・ニューギニア・ニューブリテン等に分布し北米 California からも Cook により1種記載された。1929年澤田秀三郎氏は小笠原に採集旅行をされ同地の蜘蛛類標品を岸田氏に贈られたところ，其の中に *Trithyreus* の在るのを岸田氏は見出し和名も學名も採集者に因み上記の如く定められた。岸田氏（Lansania, Tokyo, vol. ii, no. 12, p. 19 1930）はサハダムシの holotype（♀）の全形圖を示された丈で記載は未だ公になさつて



第4圖 小笠原產サハダムシ 上は背面，下は側面 著しく擴大〔岸田久吉氏より〕

居ない。其の後今日まで此の1頭以外本種を採集した人は無いので，予は實物を檢する機會無く種的標徵も體長なども知るを得ない。

3　ヤイトムシ（灸點蟲）

Schizomus sauteri Kraepelin, 1911

Schizomus sauteri Kraepelin, Mitt. Naturh. Mus. vol xxviii, p. 100, Pl., figs. 2a-h (1911)—Speijer, Mitt. Zool. Mus. vol. xxi, no. 2, p 260 (1936)

Schizomus Cook, Proc. Ent. Soc. Wash. vol. iv, no. 3, p. 249 (1899)

Nyctalops Cambridge, Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 4, vol. x, p. 410 (1872) (nom. praeocc.)

Schizonotus Thorell, Ann. Mus. Genova vol. xxvi, p. 358 (1888) (nom. praeocc.)

本屬は東アフリカ・セーシェル群島・印度・セイロン・ビルマ・臺灣・西印度群島のキューバ島，マルチニック島・中米ユカタン・南米等熱帶・亞熱帶地方に分布は汎い。

Kraepelin の原記には標品は有名な H. Sauter が臺灣高雄で採集した多數の♂，♀及び幼體で Hamburger Museum に保存されるとある。Speijer の檢したベルリンの Zoologisches Museum の標品は1906年2月8日臺灣高雄で Sauter の採集した1♂3♀♀である。Hamburg の博物館のとどういふ關係になつて居るのか其の來歴は知らない。日本では加藤正世氏が1926年3月14日臺北州士林郡芝山巖の石下で1頭を獲られた。珍品たるに氣附き其の後數回通つて採集に努め更に2頭を獲られた。之はヤイトムシの第2回の採集例であり同時に邦人による最初の採集例である。恐らく國內に現存の標品は予が加藤氏から拜借中の♀きりであらうと推定される。併し同好の士が丹念に探索したら臺灣のあちこちで見つかるものに相違無い。貴重標品故精檢し得られぬので Kraepelin の原記を專ら引用して記述する。

色彩　前方の大形の背甲は代赭色，他は概して灰色，步脚の上面に於ては灰色味が强い，大腮は帶赤色，觸鬚は代赭色。

觸鬚　兩性共大體同樣の構造を示す。基節は背甲に隱れて見えぬ。轉節は兩性共前方に鈍い彎曲を有するのみで長い突起を前方に起生させない。此の膨出の側面觀は♂では稍々直角に近く♀では110度位である。腿節は♂では長さは太

さの2倍，♀では多少ずんぐりした感があり共に下縁に尖頭或は突起を持たない。次の膝脛節は♂では長さは幅の2倍を少し超え♀では僅の2倍より稍々短い。脛節は兩性共單なる圓筒狀で長さは太さの3倍。跗節には末端に其の長さの半に達する爪を具へ共の後下方に1雙の棘がある。各節に毛を生ずるが末端に近きもの程密である。

背甲 4枚に分岐し前方のものは特に著大。眼丘は認められぬ。次に三角形の1雙の小片を隔て後方の1枚がある。後方の背板は幼體や雌では正中線に沿ひ非常に明白な白色線條があり2枚に分岐して居るかの觀がある。之が成雄だと細い區劃線として併し常に認め得る程度に殘つて居る。

腹部 12節より成る。背面では各腹板間に關節膜が良く發達して居り，各腹板から1對の後方に向ふ刺毛を起生させる。本種は觸鬚の構造で成體の雌雄を鑑別し得るが最も顯著な二次性徵は後腹部の尾狀突起物にある。予は♂標品を持たぬが原記に據るに♂の尾狀附屬物は稜の圓い三角形で幅よりも僅かに長さ勝り，柄部は上方からは殆ど心臓形の板狀部の半にも達しない。側面觀では基部に1小隆起があり次に圓味ある陷凹を隔てて正中に沿ひ一層强い隆起がある。此の隆起は次第に後方に平になる。强剛なる刺毛が特に板狀部の下方及び末端に見られる，最後の腹節（後腹）は背面後縁に於て2缺刻がある。♀の尾狀附屬物は長さは幅の4½倍，4節あるが共の分界は餘り明瞭でない。上方から觀れば殆ど眞直，最後の節に於てのみ後方に幾分尖小となる圓筒形，長刺毛を粗生して居る。

體長 原記には♂♀共3.3粍内外とあるが本種にもサソリモドキに見る如く雄偉の個體が必ず存在するであらう。予の檢した成雌は約6粍を測る。體長3.3粍内外といふのを種的標徵に數へることは妥當でないと思ふ。

4 カニムシモドキ（擬蟹蟲）

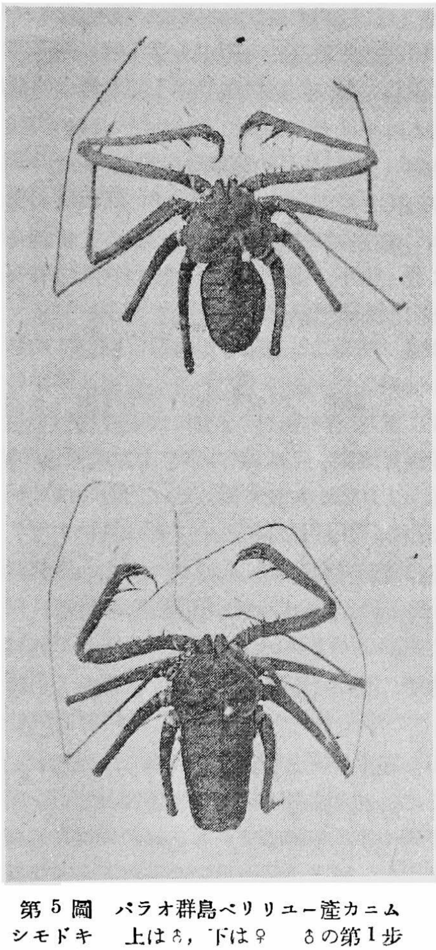
Charon grayi (Gervais, 1844)

Phrynus grayi Gervais, Walckenaer, Ins. Apt. vol. iii, p. 4 (1844)

Charon grayi, Karsch, Arch. Naturg. vol. xlv 1, p. 196 (1879)—Kraepelin, Abh. Ver. Hamburg vol. xiii, p. 42 (1895)—Kraepelin, Tierreich, Scorpiones und Pedipalpi p. 247 (1899)

Charon grayi papuanus, Esaki, Lansania vol. viii, no. 75, p. 80, 1 pl., 3 figs. (1936)

前報文に於て予は本種にカニムシモドキなる新和名を提唱した，サソリモドキなる呼稱に對する便宜上の處置であるに過ぎない。內南洋（同時にミクロネシア）よりは江崎悌三博士が最初に報ぜられた。氏はパラオ群島に隷屬する1嶼 Peliliou 島よりの1♂1♀1幼體を入手された。成體2頭は同島アシアスルに於けるペリリュー公學校長長連政氏の提供に係り幼者は1936年3月6日同じ地の腐朽した樹幹に白蟻・パラオフトヤスデ・帶馬陸・ヤヘヤマサソリ等と共に同博士の獲られたところである。成體2頭の標品を博士の格別の御厚意で拜借調査した。♀は直徑10粍の卵囊を腹部に保持して居る。卵の直徑は2.5粍である。博士は其の後更に幼體1頭を採集保存なさつて居るが御教示に據ると該標品は“1938年2月10日パラオ（本島バベルダオブ島）のガルドック植民地の開墾地で伐採された大木の比較的乾燥した樹皮を剝いだ時に獲た。南洋では樹皮や石等は相當丹念にめくつたのに此の種は前後唯2回(1回は1936年)得たのみである。皮を剝いだ時脚を擴げた儘靜止して居り觸ると急に逃げさうな姿勢だつたので直ぐに手で押へたものである”と。尙岸田久吉氏はパラオ產標品3頭を所有されて居る。パラオから最初入手されたのは1929年1月祝亥子之助氏採集の1頭でパラオ中どの島で獲た



第5圖　パラオ群島ペリリユー產カニムシモドキ　上は♂，下は♀　♂の第1步脚は折損　自然大〔江崎悌三氏より〕

ものか不明，次の2頭は1940年9月コロール島岡部正義氏の採集である。其の内の1頭（幼體）を岸田氏の御厚志により拜領するを得た。今日まで學者の手には入つた内南洋產カニムシモドキは以上の7頭に過ぎぬ。斯かる奇怪な姿態の，比較的大型な蛛形類が多數棲息して居るものならば人目に觸れぬ筈は無く標品の僅數なところから思案して内南洋では稀品と稱すべきであらう。以下の記載に用ひたのは江崎博士より拜借の成雌で今は乾燥標品になつて居るので精査に不便である。色彩は生時と略々同樣である由。

色彩　背面暗褐色で背甲は黑味强い。步脚は第2乃至第4のもの黑褐色帶と淡褐色帶と交互に並び縞を成す。腹面は赤黑色，生時は恐らく步脚の基節は際立つて栗茶色ではなかつたかと想ふ。步脚の他の部は背面と同色。

大腮　短小。第2節は略々圓筒狀で刺毛を粗生し顆粒多く，第3節は鉤狀で光澤があり刷毛狀に多數の毛を密生。

觸鬚　長大で一見第1步脚狀。基節は殆ど背甲に隱れる。轉節は内緣に2列に小棘列生し少數の毛がある。腿節は多少外方に弧狀を成す長圓筒狀で大小の顆粒に富み，内緣には2列に數本の長棘を生ずる。長棘を生ぜざる部分も緣邊鋸齒狀を成す。毛は誠に尠い。上面は栗色の部分廣く存するのが目を惹く。脛節は前節より僅かに長く圓筒狀，内緣には2列の長棘を派生し，派出しない部分も鋸齒狀，上面端部に近い2棘は殊に大きく且つ鋭い。外緣部には刺毛を列生する。蹠節は基部太く先は稍々細まり基部に近く大棘を，端部に近く小棘を夫々1雙派生せしめる。外方は刺毛が多い。跗節は全體細く鋭く内曲せる1鉤となり蹠節よりも長い。基部より2/3までには内面に刷毛狀に毛を密生する。

背甲　明かに幅は長さに勝り外緣圓く前緣に刺毛を粗生。中央に中眼丘存して2個の中眼を具へ其の左右には側眼丘があつて各3個の側眼鼎足狀に並ぶ。背甲は顆粒を密布し且つ凸凹多く，正中に沿ひ上方より2/3の邊にある陷凹を中心に斜上及び斜下に走る條溝は著しい。周緣は一樣に窪んで居る。

步脚　第2步脚はウデムシ類の標徵たる鞭狀に伸長せるもので頗る奇異の觀を呈する。轉節は他の步脚のそれと略々等長で尋常であるが，腿節は旣に他脚の脛節と同じ位の太さの棍棒狀で刺毛と細毛とを混生し，次に短い膝脛節を經て鞭狀或は絲狀の蹠節となる。25小節を算へるが何れも刺毛を生じ最後の節は端部膨出。跗節は44節より成り各節細毛を派生。爾後の步脚は纖細ではあるが步脚狀を呈して居る。腿節は最も幅廣く黑褐色帶と褐色帶と交互に並ぶ樣は比

較的單調な他部の色調に比し目を惹く。多數の棘狀毛を生じて居る。膝節は短く脛節は棍棒狀で腿節よりも長く，刺毛を密生し端部に近く白色の1聽毛を生ずる。蹠節では刺毛は愈々密なるのみならず聽毛は數本乃至十數本を生じ端部に於ては房狀に叢生して居る。跗節の刺毛は內側に於て刷毛狀に列生し第1節は長く，短い第2・3・4節を經て第5節は2岐し上方は細長く鉤狀に延長し其の先端に2毛狀突起を出す。下方は太短くて末端に2鉤爪を出し其の內方は特殊の褥盤となる。第4歩脚のみ脛節は4節に區劃される。

腹部 上面よりは廣長小判形。11節ある內，後の3節は顯著ならざる後腹部を成して居る。色彩は暗黑褐色で背板後緣は廣く褐色を呈する。頗る顆粒に富み毛は少い。下面は上面に比し汚褐色味强い。胸板は前胸板は槍形で刺毛多く中胸板は2個に分れ略々圓形，後胸板は後廣の5角形狀である。

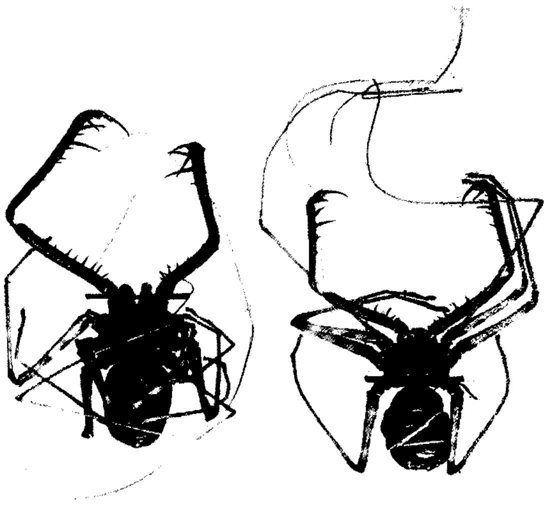
測定 江崎博士が1936年入手の3頭に就き曾て計測せられし數側（單位粍）を借用すると次表の通りである。

	體長	背甲長	背甲幅	觸鬚腿節長	同脛節長	第1歩脚腿節長	同膝節と脛節との合長	同跗節長
♂	20.5	7	11	14.5	15	18	35.5	折損
♀	23	7	10.5	11.5	12	18	35.5	約42
幼	6.3	2.5	3.5	2.7	2.1	4.5	9	10

分布 奇しくも同年鹿野忠雄氏は臺灣紅頭嶼の洞窟で *Charon* を數頭採取された。其の內の1頭を古川晴男氏が久しく保管して居られたのを頂戴して調査するに既に豫想されて居た通り本種と同定して誤無い。パラオ產標品より一層大きい成雄と考へられる。紅頭嶼產に就いては鹿野氏が近く日本動物學彙報に報告される由であるからそれを期待して居る。

無鞭蠍目は約53種（Kästner 1932）を含むが夫等はウデムシ科 Tarantulidae に統合され既揭の3亞科に區分するのが當代多く採用される樣式である。而してカニムシモドキ亞科 Charontinae は *Charon* の他に *Catagaeus* Thorell, *Phrynichosarax* Gravely, *Sarax* Simon, *Stygophrynus* Kraepelin, *Charinides* Gravely, *Charinus* Simon, *Paracharon* Hansen 等の7屬があるが *Charon* は觸鬚跗節が分節せぬので他の諸屬と檢定を誤ることは無い。Kraepelin (1899) は *C. hoeveni* Karsch, 1880, *C. beccarii* Thorell, 1888, *C. papuanus* Thorell, 1888, *C. subterraneus* Thorell, 1888〔此の時同時に記載された *C. sarawakens-*

is Thorell, 1888 を Kraepelin は擧げてないが同一視して宜しいのであらう〕等を總べて *Charon grayi* の1種に併合したから *Charon* の特徴は即ち *C. grayi* の種的標徴でもある。之より先 Lauterer (1895) は濠洲 Brisbane 産 に基き *C. annulipes* を記載したが Gravely (1915) に據れば此の種は *Charon* の範疇に屬するものでないとある。江崎博士 (1936) はパラオ産を同定するに當り「Kraepelin に據る時は *Charon papuanus* は當時迄に記載せられた本屬中の他の種類と共に *Charon grayi* に合一せしめねばならぬのであるが予は尙 *papuanus* を以て *Charon grayi* の小形な島嶼型と看做さんと欲する」との御



第6圖 ジヤワのスラバヤ産カニムシモドキ 左は♂，右は♀ どちらも硝子板に縛りつけてあるので餘計な物が見える。 縮小〔原圖〕

意見から *Charon grayi papuanus* となさつて居る。

岸田久吉氏の御配慮で Gervais の原記を覽るを得たがそれに據ると模式產地は比律賓の Manila (Cuming 採集) である。 Kraepelin に據る時は本種はフィリピン，蘭印のジャヴァ，アムボイナ，更に東してニューギニア，ビスマルク諸

島，ソロモン群島に分布する。其の後 Gravely (1915) は Indian Museum 所藏 "one immature specimen" を檢した。產地の明記を缺くが之は馬來半島產と推定される。Speijer (1937) は海峽殖民地 Raffles Museum 所藏 "one specimen, St. John's Island, near Singapore, March, 1932" を報じた。而して氏に從へば之は馬來半島から知られる第2回の標品となる由であるから同地でも稀な種類ならんと推測される。尤も比律賓では北から南に至る各島嶼に稀ならず產することは Speijer (1936) の報文からも知られる。即ちベルリンの Zoologisches Museum に保存せられる標品は當時 43 頭で其の內 42 頭迄が比律賓產である。他の1頭は "III./IV. 1891 in Süd-Java, 1500 m." とある。岸田氏も比律賓產標品を5頭所藏される。御來信に據ると夫等はルソン，ミンダナオ，バシランの產でルソン，ミンダナオのは洞穴中で山村一郞氏が苦心採集せられたものの由。此の類は洞窟內で屢々採集されるらしいのは上記諸例が示す通りである。予は古川晴男氏が久しく保管されて居た Java 產標品を入手して檢するを得た。之は成熟した雌雄でラベルには Feb. 1930 Grisee, Soerabaja, Java とある。山村八重子女史及び令兒の採集品で日本に保存されて居る標品中屈指の見事なものであらうと想ふ。本種たることに疑無いがパラオ產，紅頭嶼產を後に瞭若たらしむる尤物である。

參 考 文 獻

1893—94 Pocock, R.I. Scorpions from the Malay Archipelago. Zoologische Ergebnisse einer Reise in Niederländisch Ost-Indien dritter Band, pp. 84—99, Pl.VI

1894 Pocock, R.I. Notes on the Thelyphonidae contained in the collection of the British Museum. Ann. Mag. Nat. Hist. ser. 6, vol. xiv, no. 80, pp. 120—134, Pl.II

1895 〔黑岩 恒〕 サソリモドキの產地. 動物學雜誌 vol. vii, no. 85, pp. 394—395

1899 Cook, O.F. *Hubbardia*, a new genus of Pedipalpi. Proc. Ent. Soc. Wash. vol. iv, no. 3. pp. 249—261, pl. III

1899 Kraepelin, K. Scorpiones und Pedipalpi. Das Tierreich, 8. Lieferung, pp. 1—265, 94 figs.

1900 Pocock, R.I. The Fauna of British India. Arachnida. pp. 1—131, figs. 1—44

1905 Hansen, H.J. & Sörensen, W. The Tartarides, a tribe of the order Pedipalpi. Ark.f. Zool. vol. ii, no. 8, pp. 1—78, pls. I—VII

1906 岩川友太郎 本邦産の蠍類. 動物學雜誌 vol. xviii, no. 207, pp. 5—12, pl. II

1906 Schwargart, F. Über zwei Formen der Pedipalpengattung *Typopeltis* Poc. von Formosa Zool. Anz. vol. xxx, no. 11/12, pp. 331—337, 3 figs.

1908 Iwakawa, T. On the Specific Identity of the Scorpion-Spider of the Loochoos and Formosa. Annot. Zool. Jap. vol. vi, pt. 4, pp. 287—291, pl. XI

1911 Kraepelin, K. Neue Beiträge zur Systematik der Gliederspinnen Mitteil. Naturhist Mus. xxviii, pp. 59—107, 9 figs., 1 pl.

1912 Comstock, J.H. The Spider Book. pp, 16—21, figs. 14—18

1915 Gravely, F.H. A Revision of the Oriental subfamilies of Tarantulidae (Order Pedipalpi). Rec. Ind. Mus. vol. xi, pt. 6, no. 26, pp. 433—456, Pl. XXXI

1915 Gravely, F.H. Notes on the Habits of Indian Insects, Myriapods and Arachnids. Rec. Ind. Mus. vol. xi, pt. 6, no. 29, pp. 483—540, 4 figs, Pls. XXII-XXV [pp. 518—532]

1916 Gravely, F.H. The Evolution and Distribution of the Indo-Australian Thelyphonidae, with notes on the distinctive characters of various species. Rec. Ind. Mus. vol. xii, pt. 2, no. 7, pp. 59—86, 4 figs. Pls. I-IV

1927 岸田久吉 日本動物圖鑑. pp. 952—954, figs 1840—1843

1930 岸田久吉 裂甲類小笠原に産す……サハダムシの發見. Lansania vol. ii, no. 12, pp. 17—19 1 fig.

1930 鹿野忠雄 ヤエヤマサソリの分布. 動物學雜誌 vol. xlii, no. 496, p. 80

1931 大島 廣 天草雜俎（その五）. 動物學雜誌vol. xliii, no. 516, pp. 601—607, 3 figs. [40. サソリモドキが天草に居る p. 601]

1932 江崎悌三 多足類蜘蛛類 [岩波講座生物學]. pp. 25—32, figs 25—31

1932 Kästner, A. Pedipalpi Kükenthal und Krumbachs Handbuch der Zoologie. dritter Band, zweite Hälfte, vierte Lieferung, pp. 1—76, figs. 1—94

1934 Werner, F. Scorpiones, Pedipalpi. Bronns Klassen und Ordnungen des Tierreichs 5. Band, 4. Abteilung, 8. Buch, 1. Lieferung, pp. 1—160, figs. 1—138; 2. Lieferung, pp. 161—316, figs. 139—390

1935 Savory, T.H. The Arachnida. pp. 51—58, figs. 15—20, Pl. III & pp. 61—69, figs. 21—30, Pls. IV, VI

1936 伍 獻文 (Hsien Wen Wu) A Review of the Scorpions and Whip-scorpions of China. Sinensia vol. vii, no. 2, pp. 113—127, 5 figs.

1936 村田懋麿 鮮滿動物通鑑. pp. 605—607

1936 Esaki, T. Das Vorkommen der charontid (n) Amblypygi auf den Palau-Inseln. Lansania vol. viii, no. 75, pp. 79—80, 1 pl.

1936 Speijer, E.A.M. Die orientalischen Pedipalpen des Zoologischen Museums der Universität Berlin. Mitt. Zool. Mus. Bd. xxi, Ht. 2, pp 249—263, 15 figs.

1937 Speijer, E.A.M. A Collection of Pedipalps from the Raffles Museum. Bull. Raffles Mus. no. 13, pp. 171—175, Pls. IX-X

1937 牧野佐二郎 小笠原父島に最近移入された動物二三. 生態學研究 vol. iii, no. 1, pp. 61—63, 3 figs.

1939 江崎悌三 委任統治南洋群島に於ける人體の害蟲(第1報). 吉田博士祝賀記念誌論文篇 pp. 230—252

1939 沖波 實 極東蠍(きよくとうさそり)ノ第二次性徵. 朝鮮博物學會雜誌 no. 25 pp. 17—19, 4 figs.

1939 沖波 實 蠍(サソリ)ノ害. 朝鮮醫學會雜誌 vol. xxix, no. 2, pp. 354—365; no. 3, pp. 481—488, 1 pl.

1939 潘 承彬(P'an Ch'eng-pin) Morphology and Anatomy of the Chinese Scorpion *Buthus martensi* Karsch. Peking Nat. Hist. Bulletin vol. xiv, pt. 2, pp. 103—118, 2 pls.

1939 岸田久吉 熱河省產蜘蛛類全蠍目 第一次滿蒙學術調査研究團報告第五部第一區第四編第十輯 pp. 1—67, Pls. I-IV

1940 江崎悌三 サソリモドキの分布. Acta Arachnologica vol. v, no. 2, pp. 91—99 1 fig.

1940 江崎悌三 サソリモドキ追記. Acta Arachnologica vol. v, no. 4, pp. 215—216

1941 高島春雄 琉球列島產全蠍目及脚鬚目. Biogeographica vol. iii, no. 3 に印刷中

(皇紀2600年12月28日稿)

活字不足の爲不本意ながら蠍とすべきを蝎の字で代用した所がある。御諒承下され度い。